

特別インタビュー

グリーンランド、北極政治の専門家、高橋美野梨さん



グリーンランドに関する連載をお寄せ下さっている美野梨さんは、研究のために今年1年間コペンハーゲンに滞在されています。編集部は、美野梨さんとご家族に初めてお会いし、お話を伺いました。ご自身やご家族のことや、研究について幅広くお話をいただきました。

●簡単な自己紹介をお願いします。

グリーンランドとデンマークを中心に、北極の現代政治を研究しています。方法論は、地域研究です。自らの立場の移ろいを積極的に引き受けながら、物事を総合的に理解し、記述し、説明することを目指すアプローチです。「立場の移ろい」とは、時に専門家になり、学生になり、旅人にもなるような、ちょっとそれっぽい言い方をすると、「ポジションの複数性」とでも呼べるようなことを意味しています。地域研究には、こうした立場性の揺れを、むしろ積極的に受け入れて研究を進めていくようなところがあります。自らの立場の移ろいに寛容になれるところに居心地の良さを感じて、そうした立場を積極的に打ち出しながら、「右か左か」といった、これまで普遍的であると認識されてきた構図を異化して、その上に何が立てられるかを考えてきました。

筑波大で博士の学位を取った後に、ポスドクとして、札幌での生活を始めました。その後北海学園大に就職しました。札幌生活はもう10年以上になります。今年度（2024年度）はサバティカル——正確には大学の制度ではなく、日本学術振興会・科研費国際共同研究強化Aのプロジェクト——で、コペンハーゲンのデンマーク国際問題研究所で研究しています。

●今年度のデンマーク滞在はご家族も合流されたとのことですが、ご家族のことを少し教えてください。

妻と、今年で9歳と5歳になる2人の娘がいます。上の娘が2歳の頃、今回と同じサバティカルで1年間、オールボー大に滞在しました。ですので、家族としては2回目のデンマーク滞在不。妻は学生時代にドイツで暮らしていたことと（写真—今年の夏休みに、妻が学部時代を過ごしたフライブルクに行ってきました）、オールボーの経験もあり、コペンハーゲンでの生活にも、妻はもちろん、家族としても比較的スムーズに入っていけたように思います。今回は、S-togのカールスベア駅前にある、カールスベアが保有する「研究者アパート」なるところで生活しています。上の娘は、そこから1kmくらい離れたところにあるシュタイナー教育の小学校に通っています。教育が非言語的なので、言葉が出来なくても問題がなく、とても楽しく過ごしているようです。下の娘は、幼稚園の空きがなかなか見つからなかったのですが、秋から家の近くの幼稚園に通い始めました。札幌では、郊外に住んでいるので、コペンハーゲン、それもカールスベア駅周辺は十分に「大都会」で、少し疲れてしまうところもあります。ただ、アパートの前に大きな公園があるので、癒しも得ています。

●オールボーとコペンハーゲンの違いは何かありますか？

とても素朴な話ですが、街の規模が違うので、生活のしやすさという点ではオールボーがよかった、という話は妻がよくしています。オールボーは一つの場所に多くの機能が集中している印象なのに対して、コペンハーゲンはそうではない。首都としては小さいと思いますが、それでもやはり首都だなというか、観光客や僕たちのような一時滞在者も含めて、人や物の移動、情報の集積等のあらゆる面でスケールが大きな場所だなと感じています。

あと、これはオールボーがとか、コペンハーゲンがとかの話ではないのですが、今回のコペンハーゲン滞在でよく感じているのは（なので個人の感想になってしまうのですが）、僕（たち）が接してきた人たちの多くが、何か問題が発生した時、その原因を国や社会や制度それ自体に求めず、自己の中に見出していくようなところがあるなということです。以前、「私たちの問題は全て自分自身で作り出したものにすぎない（we only have the problems we place on ourselves）」という考え方がデンマークにはある、というような意見を聞いたことがあります。まさにそんな感じだなと思ったり、どうなのかなと思ったり。ちょっとふざけた感じに感じてしまいましたが、実は、

この辺り興味があります。きちんと勉強してみたいと思うようになって、年度の始め頃に「分極化と分断のあいだに一デンマークにおける中道空間の機能について」と題した研究費の申請書を、村田学術振興・教育財団に出しました。夏に結果が出て、運よく採択頂きました。研究を始めてみることにしました。

研究の主題は、「デンマークが、右派＝市場原理的＝競争と、左派＝福祉国家的＝平等という、政治的立場を示す二値のあいだに立ち現れる中道という空間領域の創出を、分極化しつつも分断を抑止する現実的、もしくは戦略的な解としてきた」（申請書から）可能性を問うもので、必ずしも上で書いたことを直接的に扱うものではありません。ですが、問題を自己の中に見出していく思考態度が仮にあるとして、政治力学は、そうした思考の集積の上でこそ働くものだと思うので、デンマークの現代政治を総合的に理解する際の重要な要素の一つとして受け止めて、研究を進めてみたいと思っています。

●研究の話になりましたので、ここからはその話を。グリーンランドとデンマークの現代政治が主たる研究対象とすることでした。グリーンランドに携わるきっかけは何だったのですか？

母子家庭で育ちました。母が東海大付属の高校教員で、東海大デンマーク校（1988～2008までシェラン島南部 Præstø にあった中学校・高校）に転勤になったことから、小学校2年生から中学3年生の受験前までデンマークで生活しました。僕は東海には行かず、最初から現地校に通いましたが、それがめちゃくちゃ楽しかったです。楽しかった、というか、まさに今上の娘が通っている学校がそうであるように、教育全体が非言語的で、心身を動かしながら、五感に残されてゆくさまざまな経験を積み上げていくところに教育の価値付けがなされていました。それがとにかく自分には合っていたんです。

ただ、だからといって、日本の教育とは相性が悪かったと言いたいわけでもないんです。というのも、デンマーク滞在中に母が病気になる、日本で手術

を受けることになったことから、小学校6年生の時、1か月半だけ母の実家がある群馬県高崎市の公立の小学校に通ったことがありました。そこでの時間もめちゃくちゃ楽しかったですね（笑）。デンマークではいっさい勉強しなかったもので、久しぶりに座学の時間を過ごしたことも新鮮でした。担任の先生が、海外の日本人学校での勤務経験がある方だったので、恵まれた環境だったのかもかもしれません。

話を戻しますが、そうしたデンマークでの原風景が、将来的に、何らかの形でデンマークに携わる仕事に就きたいと思いつける根っこになったと思っています。家族・親族に教職に就いている人が多かったので、小学校の時から「将来の夢」は大学教員でした。研究（のような何か）を始めた修士課程の頃、デンマークが語られる時に、なぜ「本土（デンマーク）」だけが焦点化されるのか気になりました。デンマークが、あたかもデンマーク本土だけで歩んできたかのような表象のされ方は、一般書だけでなく、多くの研究書にも当てはまります。グリーンランドは最初から蚊帳の外に置かれるか、例外として脚注で言及されることが多い客体であり続けてきました。だけど、さまざまな局面で、グリーンランドの果たしてきた役割は——多くの場合それはグリーンランドを客体化し、従属的な立場に置くものでしたが——大きかったのではないかと、議会の議事録や政府の報告書等を渉猟することで分かってきました。修士課程の最初の頃に、グリーンランド面白そうじゃん！と思ったことが、研究という意味ではスタートなのかなと思っています。

●これまでの活動の中で、何か印象深いエピソードなどあれば教えてください。

まず、グリーンランドを中心に、北極の現代政治について日々考えていますので、日本でも、デンマークでも、レアカラです。日本ではまずもってグリーンランドを社会科学から勉強しようとする人がいないという意味でレアです。デンマークでは、そのようなアプローチから研究されている方は一定数いますが、今度はなぜ日本人が？と

いう意味でレアです。が、僕は、グリーンランドを通じて、日本のことも同時に考えることを目指してきました。これまで向き合ってきた主たる事例は、米軍基地と捕鯨の政治です。どちらもグリーンランドにとって中核的な政治事象です。僕にとっては、前者は沖縄との対比において、後者は持続的利用の立場に立つ世界でも数少ない主体同士という意味で、とても重要なテーマであり続けています。

「印象深いエピソード」とは違うかもしれませんが、沖縄は、在沖米軍基地の整理縮小を掲げて、玉城デニー県政が発足した2018年以降、日米の枠組み＝サコ（SACO: Special Action Committee on Okinawa）に、沖縄が影響力を行使するサコワ（SACWO: Special Action Committee With Okinawa）という協議体の設置を求めてきました。実はこれと類似した協議体が、在グリーンランド米軍基地を対象に、既に2004年に設置されています（JDnet63で書かせて頂きました）。もちろん、先行事例があるからそのまま日本に持ってくればいいという話ではありませんし、そもそもグリーンランドの事例を理想化することもできない。そこには権力の非対称性が確認できたり、協議体の実質的な効用をどのように評価するかという点だったり、難しい問題が横たわっているからです。ただ、それが実質的な意味を持つかどうかは別にして、グリーンランドの事例を参照することは、沖縄を考える際の発想の幅を広げてくれるかもしれないと思うんです。そういう事例の一つとして、グリーンランドが日本の言論空間に参入していけるのだとしたら、僕にとってそれは研究上の重要な画期になると思っています。

●もう一方の捕鯨についてですが、最近では、ポール・ワトソン氏の問題もありますね。

そうなんです。7月に環境活動家のワトソンがグリーンランドの中心都市ヌークで拘束・勾留されたことで、日本の（商業）捕鯨がふたたび注目を集めるようになりました。日本は、JARPA IIという調査捕鯨プログラムを南氷洋で展開していた2010年に、洋上でワ

トソンら活動家から「攻撃」を受けました。このことに対して、日本は、インターポール（国際刑事警察機構）を通じて、国際手配を要請しました。これを受けて、給油目的でヌークに寄港したワトソンをグリーンランド当局が拘束したという流れですが、ワトソンらは他の場所にも寄港したり滞在したりしてきたのに拘束されず、なぜグリーンランドで拘束されたのかという観点から、ワトソンの弁護団は、グリーンランドが日本と同じ鯨類の持続的利用の立場を取っていることから、今回の拘束・勾留は極めて政治的で、あるいはグリーンランドは日本に利用されている、と主張しています。ここで改めてクジラの利用と保全、あるいはクジラを水産資源と見るか、環境保全の対象と見るかという、異なる、そして交わらない世界線が露呈しました。水産資源の一つにすぎないクジラが、国際関係において論争の的になる、ある意味で異常な状況です。このことについて、デンマーク国際問題研究所の媒体の一つである「ポリシーブリーフ」（政策決定者向けの政策提言書）に寄稿もしました。今回の会誌が出る頃には公開されているかもしれません。

●政治、環境問題等でも興味深いグリーンランドですが、今後注目していることや私たちが注目すべきことがあれば教えてください。

多様な論点があると思います。僕の限られた視野の中だけの話になってしまいますが、最大の関心事は、グリーンランドの独立問題だと思います。グリーンランドは、北極海に接する諸主体の中で唯一の非国家主体です。グリーンランドが自らの地位選択において、いかなる選択を下すのか、デンマークがどこまでその選択を許容するのかは、北極の秩序を左右する大きな論点です。独立するかどうか、独立するとして、それは新しい国家を意味するのか、自由連合のようなデンマークとの権限分有の上になされるのか。独立しないとして、既に獲得している広範な自治権がどのように維持され、履行されるのかなどが、内外で注目されています。機密文書を公開するウェブサイト、

ウィキリークスが2007年に明らかにしたところによれば、アメリカは、2004年の時点でグリーンランドが新たな独立国家になることが、多くの識者の認識よりも早く到来する可能性があると考えていたようです。あるいはそれゆえに、アメリカは、北極の「地殻変動」に敏感になると同時に、グリーンランドとの接触を強化する機会を得ようとしていたことも、ウィキリークスに暴露されました。元来アメリカは、その戦略的重要性から、デンマークよりもグリーンランドとの関係に強い関心も持ってきました。2019年のトランプ大統領によるグリーンランド購入発言は記憶に新しいですが、アメリカは第二次世界大戦中から、米軍の最高機関である統合参謀本部の基地に係わる文書において、世界で最も重要な基地の一つとしてグリーンランドを位置付けており、1946年にはトルーマン大統領も購入を打診するなど、文字通りグリーンランドを「裏庭」にすることを画策してきました。近年の温暖化によって地下資源のポテンシャルにも注目が集まるようになり（JDnet62で書かせて頂きました）、グリーンランドがいかなる選択を採るのかはますます注目されています。

●最後に、グリーンランドに関する本で、おすすりはありますか？

専門用語ばかりの「堅い」本は除外させていただきます。また日本語の本に限定した上で、ということで行くと、自分が係わった本で恐縮ですが、、、小澤実・中丸禎子・高橋美野梨編著『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための65章（エリアスタディーズシリーズ140）』（明石書店、2016）は、一般書として多様なトピックを手際よく紹介するもので、ぜひお読みいただきたいです。実は今この改訂版の準備が進められていますが、初版で扱った論点とは被らないように章を組んでいます。もう少しディープにグリーンランドに触れてみたいという方には、（自分のばかりですが・・）高橋美野梨編著『グリーンランドー人文社会科学から照らす極北の島』（藤原書店、2023）は、本当におススメです！！（笑）。僕を含めて9名の共著

による論文集です。ヴァイキングの時代から現代までを、人類学、歴史学、宗教学、文学、政治学、地域研究など、広く人文社会科学の知見を縫合して編んだ書籍です。

グリーンランドを主題化したものではありませんが、広くグリーンランドを考える上で価値があるものとして、僕の人類学の師であるスチュアートヘンリ（本多俊和）先生の編著書『採集狩猟民の現在：生業文化の変容と再生』（言叢社、1996）

や『「野生」の誕生：未開イメージの歴史』（世界思想社、2003）も素晴らしいです。

もし、もっとさらに、という方がいましたら、今回取り上げた米軍基地と捕鯨について、オンラインで読める僕の英語とデンマーク語の論文がありますので、読んで頂けると嬉しいです。

<https://tidsskrift.dk/okonomi-og-politik/article/view/127555/173824>
<https://minpaku.repo.nii.ac.jp/records/8607>

このたびは貴重な機会を頂き、本当にありがとうございました！

補足：ポリシーブリーフが公開されました。

<https://www.diis.dk/en/research/whaling-politics-two-worlds-that-never-meet>